

平成 12 年度クロソイ放流技術開発事業調査（抄録）

植村 康

1 市場調査（脇野沢村漁協）

放流後 5 年以上が経過し、再捕が終了したと考えられる平成 2 年度から平成 7 年度放流群の再捕率は、0.53 から 5.78%であった。

平成 11 年度（平成 11 年 7 月～平成 12 年 6 月）クロソイ漁獲尾数は、19, 272 尾で、規格別では、200 g 以下の込み 1 及び込み 2 が全漁獲尾数の 72%を占めていた。標識魚は 327 尾、1.7%で、月別では 10 月の 10.89%が最も高く、漁獲が最も多い 12 月は標識魚の割合は 0.24%と低かった。規格別では大規格が高く、小型になるにつれて低くなる傾向があった。

2 罎調査

クロソイは 0 令から 3 令が出現した。1 令個体が 202 個体、76%を占めた。標識個体より無標識個体の全長、体重が大きく、摂餌率が高い傾向があった。空胃個体の割合は、無標識個体より放流個体が高く、同時に漁獲されたアイナメ、クジメは低かった。

放流クロソイ稚魚の食害魚は全て大型のクロソイであった。

再捕したクロソイ標識魚に抜去腹鰭の再生がみられた。

3 放流前天然餌料給餌試験

夜間のライト点灯では、天然餌料を摂餌しなかった。

4 潜水観察

放流後、クロソイは群れで遊泳し、沖合に向かった。クロソイ若令群は沿岸の石の間に多く棲息しているので、放流後、速やかにその場所に移行する放流方法が望ましい。

5 脇野沢人工礁漁獲クロソイ

沖合の人工礁の 1 令及び 2 令は沿岸クロソイの同令と比較して大きく、成長の良いものは沖合に移動すると推測した。成長の悪い個体も 2 令までに沖合に移動すると推測した。